



TITLE:

山西を中心とする金將宗翰の活躍

AUTHOR(S):

外山, 軍治

---

CITATION:

外山, 軍治. 山西を中心とする金將宗翰の活躍. 東洋史研究 1936, 1(6): 509-532

ISSUE DATE:

1936-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138719>

RIGHT:

# 東洋史研究

第一卷  
第六號

昭和十一年八月發行

## 山西を中心とせる金將宗翰の活躍

外 山 軍 治

### 一 緒言

二 金の山西進出と山西に於ける宗翰の地位の確立

三 漠地に於ける宗翰の活躍 (一)太宗即位後に於ける外征諸將の權力増大 (二)山西經略と宋都攻陥

(三)宗望・劉彥宗死後に於ける宗翰の勢力伸張 (四)河東・河北の確保と齊國建設

四 金室内部に加へられたる宗翰の勢威 (一)漢人官僚に對する抑壓 (二)熙宗擁立

五 宗翰の失脚

六 結語

### 一 緒 言

宗翰<sup>①</sup>は金の太祖阿骨打や太宗吳乞買の伯父勅者の孫である。太祖が伐遼の軍を擧げるや、之に従つて戦功を積み、太祖の弟杲(本名斜也)の副將として遼中京(熱河省大名城)を攻陥し、西走した遼帝天祚を追撃せんが爲めに兵を提げて山西北部に進出し、この地方に早くも金の勢力を扶植した。太宗天會三年、天祚帝を擒へて遼室を滅した勢に乗じて伐宋の軍を興す

や、西京今大同縣より太原方面を攻略し、再び宋を攻めては河北方面より南下せる太祖の皇子宗望と共に宋都汴京を陥れ、徽・欽二帝を擒獲して北宋の滅亡を致さしめ、次で部將をして陝西を經略して東侵の機會を覘ふ西夏の勢を殺ぎ、自らは河南山東の地に轉戦して宋の勢力の芟除に努めた。その後は専ら西京に駐屯して完顔希尹、高慶裔、蕭慶等を股肱として儼然たる一大勢力を形成し、新たに獲た河東・河北の地の統治に懈心し、宋の降臣劉豫なる者を河南の地に封じて宋に對する前衛國齊を建設せしめて南宋を壓迫し、對宋交渉の如きも専ら彼一個の方寸によつて處斷した。實に、太宗の治世の後半は、漢地に於ける統治經營は全く彼一人の手によつて爲されたかの觀を呈してゐる。本編の目的は、山西を根據として勢威を振ひたる宗翰の活躍を述べ以て創業期に於ける金の國力伸展の姿を窺はんとするに在る。

## 二 金の山西進出と山西に於ける宗翰の地位の確立

金の山西進出の第一歩は、宋よりもちかけられた夾攻の約に従つて遼を討ち、太祖天輔六年正月その中京今河南省大名城を陥れた後、燕京より西走せる遼帝天祚を追撃して山西北部に進軍し、山西北部の要鎮遼の西京大同府今大同縣。宋側の史料には多く雲中となす。を攻取したに始る。天祚追撃、山西進出の急先鋒は實に宗翰その人であつたのである（金史卷二本紀。卷七四宗翰傳。卷七六果傳宗翰傳）。西京は三月壬申十三日一度び降つたが、同月乙亥十六日復た叛き、四月辛卯三日金軍は遂に之を攻陥した（金史卷二本紀。卷七六果傳宗翰傳）。金史卷七宗雄傳によれば、西京が一度び降つて復た叛いた時には、金軍の糧餉盡きんとしてゐたので攻略を中止せんと議も出たが、宗雄は、「西京都會也。若委而去之。則降者離心。遼之餘黨與夏人得以窺伺矣」とて之を一蹴して攻撃を續けたとある。この時天祚帝は逃れて陰山に在つて未だ之を追捕するには至らず、諸路の遼兵尙數萬に上るといふ状態である（金史卷二本紀。卷七四宗望傳）。その上西夏が遼を援けて東侵の機を窺つてゐることは金軍にとつて甚だ警戒すべきことであつた。事實西夏はこの年六月將李良輔を遣し遼を救はんとして天德の境に來攻してゐる（金史卷二本紀。卷七一韓魯傳。卷一三四西夏傳。其室神道碑）。又天祚帝

が敗竄の身を西夏に投ぜんとし西夏亦之を迎へんとした事實（金史卷八一耶律懷義傳。卷一三二完顏元宜傳等。）は兩者の關係の密なりしを示し、これ亦金軍の尤も憂ふる所である。なほ燕京に於ては天祚の出奔後耶律渚（捏里）推されて帝と稱し、郭藥師の率ゐる強力なる常勝軍を擁して一方を保有してゐる（遼史卷二九本紀。契丹國志卷十一等。）。金軍の山西進出によつて天祚との連絡を斷たれてはゐるが金軍この地を放棄せんかその動きも逆観できぬ。又南には燕雲十六州④を回復せんものと進出の機を待つてゐる宋がある。實に西京は金軍の攻取せざるべからざる要樞であり、この地を占據したことは實に金軍の成功であつた。

この後金軍は西京を根據として遼軍と交戦し、遼の降人耶律坦をして山西邊外の諸部族を招來せしめ、太祖の異母帝閣母や完顏婁室等は今の綏遠省南部の天德・雲内・寧邊・東勝等の諸州を招降し（金史卷二天輔六年四月戊戌朔條）、太祖の從兄弟幹魯、婁室等は西夏の將李良輔を天德の境に大破する（金史卷二本紀六月。卷七一幹魯傳。卷七二婁室傳。婁室神道碑。）等、この方面の經略に腐心した。又邊外諸部族の制し難きを慮つて之を金の本地に徙住せしめし事は當時金軍の常套手段であり、太祖の政策に基づく所である。

さてこの時遼帝は陰山に在り、燕京には耶律渚が立ち、諸路の遼兵尙數萬に上る状態で、未だ充分征討の目的を果し得ないとみた金軍都統杲は太祖の親征を乞うたので、太祖は弟吳乞買を京師に留めて監國と爲し兵を率ゐて八月今の察哈爾南部に至つた。天祚擒獲の意は果さなかつたが、歸化州宣化縣・奉聖州涿鹿縣西・蔚州蔚縣等降つたので（金史卷二本紀等）

金軍はこの方面を占據して燕京進出の鍵鑰を把握するに至つた。一方燕京を攻取すべくして大敗した宋の重賞は密使を以て金軍の應援を求めたので（皇宋十朝綱要卷十八）、十二月太祖は全軍を率ゐて燕京に進撃した。この時耶律渚既に死し、妻蕭氏

政を攝つてゐたが逸早く逃走し、遼臣左企弓、劉彥宗等表を奉つて降り、燕京は難なく金軍の手に陥つた（金史卷二本紀）。

金は宋との約に従ひ、翌天輔七年宋宣和五年、歲幣の提供を條件として燕京及び涿縣・易縣・檀縣・順縣・景縣涿縣・易縣・檀縣・順縣・景縣等六州の地を交割したが、燕京の富戸、工匠等は之を内地に移したので、宋はたゞ空城を得たに過ぎなかつた（金史二本紀。宋史卷二二本紀等）。山西方面に於ては、金軍が東に向つた後は、遼軍少しく勢を挽回したので、太祖は幹魯を都統となし宗

望を副たらしめて之を伐たしめた。四月幹魯、宗望は遼帝を陰山に襲ひ、婁室等は耶律大石を龍門察哈爾龍關縣西北の東に破つて之を擒へ、又幹魯、宗望等は權六院司喝萬質を白水濼山西天鎮縣西北に破つて捕へ、遼帝が輜重を青城歸化城南に留め、兵萬人を以て應州山西應州縣西に往かんとしてゐるを聞き、宗望、婁室、銀朮可その他の諸將をして追襲せしめて大打撃を與へてゐる（金史卷二本紀。卷七四宗望傳等）。さて一方遷徙を強ひられた燕京の居民は、遼の臣にして今は金の南京平州。河北盧龍縣の留守たる張覺（宋側の史料は多）を擔ぎ上げ五月金に叛旗を翻さしめた。閻母命を受けて之を攻めたが大敗したので、山西邊外に轉戦してゐた宗望に命じて之を伐たしめ、宗望は十二月之を大破し、張覺は宋に走つた（金史卷二本紀等）。かくしてこの亂は平定されたが、この亂の勃發は、徒らに領土を擴むるを望まず、攻略せし地方の居民は之を金の本地に移徙して國勢の充實を圖らんとする、いはば滿洲中心主義ともいふべき太祖の政策の破綻を意味するものとして注目すべきである。

太祖は軍を班して六月鶯鶯濼箭内博士によれば察哈爾蒙古史研究七五四頁に至つて病を獲、歸國せんとするに際し、山西より燕京攻拔に従つてゐた宗翰に命じて西北・西南兩路都統（金史卷二本紀等にはたゞ都統とあるが、卷三本紀天會二年正月甲戌條及卷一三四西夏傳によつて補ふ。）と爲し、太祖の從兄弟昱、幹魯をして之が副たらしめ、兵を雲中に駐めて邊に備へんことを命じた（金史卷二本紀）。こゝに於て宗翰は、幹魯、婁室、完顏希尹等の諸將を擁し、河北方面の攻略に従事する宗望等の勢力と對立する一大勢力を形成することゝなつた。山西に於ける宗翰の地位はかくして確立したのである。

### 三 漢地に於ける宗翰の活躍

#### (一) 太宗即位後に於ける外征諸將の權力増大

天輔七年八月甲戌二十八日太祖は歸國の途に崩じ、九月丙辰六日同母弟諸班勃極烈〔女眞語で大官の意〕吳乞買位に即いた（金史卷二本紀）。即ち太宗である。太宗は諸將を統御する才幹を缺き、侵略慾に燃える外征諸將の勢力にひきづられ、太祖の滿洲中心主

義を踏襲せんとしても到底出来得べくもなかつた。これは先づ山西割讓問題に於て現れる。宋は屢々使を遣して山西諸州の割讓を請うたので、宗翰は一度びは武左雲縣南、朔縣二州を與へることを許したが（金史卷七四宗翰傳。卷三本紀天會元年六月條には蔚州を加へて三州となし、十朝）、結局は交割しようとせず、天會二年正月、宗望と共に太宗に請ひ（金史卷三本紀宣和五年六月條一八七月戊午條はその上雲中府を加ふ）、「宋人不歸我叛亡（宋が張覺を匿したことを指す。）」。阻絶燕山往來道路。後必敗盟。請勿割山西郡縣」といふと、太宗は、「先皇帝嘗許之矣。當與之」（金史卷七四宗翰傳）とてこの請を一蹴したが、其後幹魯が、遼帝と、燕京に強勢を誇る郭藥師との連絡を斷つ爲めにも之が割讓を止められたしと願つた時には、「宗翰請毋與宋山西地。卿復及此。疆場之事當慎毋忽」（金史卷七一幹魯傳）と讓歩の態度を示してゐる。宗翰は復び奏して宋が夾攻の約に於て定められた事項を履行しなかつた事實を挙げ、「且西鄙未寧。割付山西諸郡則諸軍失屯據之所。將有經略。或難持久。請姑置勿割」（金史卷七四宗翰傳）といつたので、太宗は遂に宗翰の言に従つて割讓を止めた（金史卷三本紀天會二年閏三月丙午條）。かくて山西北部の地は永く金の前進根據地となつたのである。

天會元年十月には空名の宣頭百道を宗翰に與へ、「今寄爾以方面。如當遷授必待奏請。恐致稽滯。其以便宜從事」（金史卷三本紀十月壬辰條）といつてゐる。これは宗翰ばかりでなく、南京方面の軍帥に對しても、天會二年正月、空名の宣頭五十、銀碑十を宗望に給し、二月には南京の官僚に詔諭して、「小大之事必關白軍帥。無專達朝廷」といひ、又宗望に命じて、「凡南京留守及諸闕員。可選勳賢有入望者就注擬之。具姓名官階以聞」（以上金史卷三本紀）といつてゐる。これ即ち外征軍將帥の權力増大を物語るものに外ならぬ。更に太祖の陵に朝せんが爲めに入見した宗翰は、上奏して、「先皇帝時。山西・南京諸部漢官。軍帥皆得承制除授。今南京皆循舊制。惟山西優テス以朝命」るのは不公平だといふと、太宗は、「一用先皇帝燕京所降詔勅從事。卿等度其勤力而遷授之」（金史卷七四宗翰傳）と答へてゐる。これは太宗の初年、山西に於ける漢官の遷授は朝命を以てしたのに對する不平である。太宗は先帝の詔に従つたものであると辯解し乍ら、遂

に宗翰の希望を容れてゐるのである。

又宗翰は太宗の統制力なきに乘じ他の將帥を壓して自己の勢力を擴張するに汲々としてゐる。この頃河北には宗望在り、熱河方面には、太祖や太宗の叔父に當る穆宗盈歌の子撻懶が經略に従つてゐた。宗翰は、「分宗望・撻懶・石古乃、精兵討諸部」(金史卷七)といふ事まで請うてゐる。之に對して太宗は、天會二年二月(金史卷三本紀二月丙午條)詔して、宗望の軍は分つべからずとて、別に精銳五千を宗翰に給してゐる(金史卷七)。太宗即位後に於ける外征諸將の勢威の増大、殊に山西に於ける宗翰の勢力伸展の状態は上述の如くであつた。

こゝに金の外交の成功といふべきは西夏との和好の締結である。前述の如く西夏と遼との間には密接なる關係あり、遼帝は西夏に奔らんとしてゐる事實も傳へられた。宗望は陰山に至り、使を西夏に遣して利害を説いて和好を示し、その遼を救はんとする心を沮疑せしめ、遼帝の執送を求めた(金史卷七四宗望傳。卷一三二)ので、天會二年西夏は始めて誓表を奉り、從來遼に事へた禮を以て藩と稱して割賜の地を請うた(金史卷三本紀。卷一三四西夏傳)。こゝに於て宗翰は制を承けて下塞以北、陰山以南、乙室、耶剌(西夏傳は、吐祿渾の西の地を割與し(金史卷三本紀正月甲戌條。卷一三四西夏傳)、こゝに形の上だけにもせよ金と西夏との間に和好が保たれることゝなつたので、窮餘の天祚帝は翌天會三年二月遂に婁室の爲めに余睹谷(雍正山西通志卷二一山川五山陰縣の條には)に擒へられ(金史卷三本紀二月壬戌條。卷七二婁室傳。松漠紀聞等)こゝに遼は名實共に滅びたのである。

かくて宿望を達した金軍將帥閼母、宗望、宗翰等は、宋が歲幣を提供せぬ事、宋軍海道より來つて金領を攻略せし事、童貫及び宋に降つた遼の常勝軍の首領郭藥師が燕京に於て軍備をとゝのへ居る事等を擧げ、苟くも之に先んじなければ後患を來さんとして、しきりに伐宋の軍を興さんことを請うたので(金史卷七一閼母傳。卷七四宗望傳等)、天會三年十月、太宗は諸將に詔して宋を伐つことゝなし、諸班勃極烈杲をして都元帥を兼ねしめ、京師に留つて太祖の庶長子宗幹等と國政の處理に當ることゝなし、宗翰を左副元帥に、完顏希尹を右監軍、さきに宋より降りし耶律余睹を右都監となして西京より太原に向

はしめ、撻懶を六部路都統、斜也をして之が副たらしめ、宗望をして南京路都統となし、閼母をして之が副たらしめ（この後宗望の請により、閼母を南京路都統となし、掃喝を之が副たらしめ、宗望は閼母、劉彥宗兩軍の監軍となる。金史卷三本紀參照）、遼の降臣にして、金の知樞密院事たる劉彥宗を漢軍都統となし、南京より燕京に向はしめた（金史卷三本紀）。これ金に於ける元帥府の始建である。都元帥たる杲は兵を統べず京師に留つて國政の處理に當つた關係上、漢地の經略、統治は専ら宗翰、宗望等外征軍將帥の手に委ねられるといふ情勢を生じたのである。

こゝに於て金國は、京師に於ては金室を中心として金の本地の統治、官制、制度の制定が行はれ、漢地に於ては外征諸將の手によつて經略統治が進められ、いはゞ二元的の發展を爲すに至つた。而して、京師に於ける國家組織の完成には、漢人特に遼の臣僚たりし燕地出身の所謂燕人の參劃が重きを爲してゐたことは顯著な事實であり、彼等は強力なる諸將の不在中を幸ひにその才幹を振ふを得た。⑩かくて金國は京師に於て、先づ漢文化の攝取に急ぐのである。

## (二) 山西經略と宋都攻陷

山西・河北の兩軍は共に南伐の歩を進め、燕京を攻めた宗望等は、この年十二月燕京駐屯の常勝軍の首領郭藥師の歸順によつて燕京近傍を金軍の手に收め（金史卷三本紀）、北支那の險要を諸じた常勝軍の先導によつて南下し、早くも翌四年（靖康元年）正月汴京を圍んだ。宋は前年十二月徽宗責を引いて位を退き欽宗が即位してゐたが、金軍は宋をして金五百萬兩、銀五十萬兩等の提供、中山（河北定縣）・河間（河北河間縣）・太原（山西太原縣）の三鎮二十州の地の割讓、金帝は伯、宋帝は姪の關係となる事等を約せしめ、二月軍を班した（金史卷三本紀。宋史卷二二本紀。東都事略卷一二六附錄四。十朝綱要卷十九等）。

一方宗翰は河陰（山陰縣西十五里）より發し、十二月朔州縣（朔州代州縣）を陥れた。この頃宋將譚楨が燕京の常勝軍に對抗して河東の漢兒を募つて編成した義勇軍（北盟會編卷一九）が金軍に降り、河北方面に於ける常勝軍と同様に金軍の嚮導を爲したのは甚だ興味ある事實であり、太原までの金軍の進出は之が爲めに甚だ容易であつた（大金國志卷三本紀）。然るに山西中部の雄



鎮太原はいつかなこと陥らぬので、宗翰軍は南進の勢を殺がれざるを得なかつたのである。宗望軍の情報判らぬので、宗翰は銀朮可等を留めて太原を圍ましめ、自らは師を率ゐて南下し、威勝軍縣を降定し、隆德府縣を下し（金史卷三本二月壬）澤州晉城縣に至つた時、宗望軍は三鎮の割譲を約せしめて引き揚げたことを知り、文水縣・孟縣孟縣を取り、復び銀朮可を留めて太原を攻めしめ、三月雲中に引揚げた（金史卷三本紀）。雲中に還つたのは西夏に背後を衝かれるのを怖れた爲であらう。大全國志卷三に、「粘罕（宗翰の本名）遇城必攻。故比幹（宗望の本名）其行稍緩」とあるが、太原が陥らぬので長驅汴京を衝くこともならず、山西各地を攻略して太原を孤立無援に陥らしめんと努力したもので、城に遇へば必ず攻取したといふ事が金の勢力を山西各地に派及するを速かならしめたことは考へ易い事實である。

さて宋に於ては勤王の軍が集るにつれて漸く三鎮の割譲を拒否し、「祖宗（東都事略）地尺寸不可與人。且保塞陵寢所在。誓固守。不忽陷三鎮二十州之民以媮頃刻之安」（卷一二）と強よがり出し、將を遣して三鎮を應援せしめた。一方さきに宗翰が宋に遣した蕭仲恭を買收し耶律余睹に書を送り、遼の社稷を復興せんことを以て之を誘動せんとした事が發覺したので（金史卷七四宗翰傳）、八月、宗翰、宗望等は再び兵を擧げて南伐することとなり（金史卷三本紀）、宗翰は八月西京を發し、九月漸く太原を陥れ、部將鶴沙虎は平遙同今・靈石同今・孝義同今・介休同今の諸縣を取つた（金史卷三本紀）。太原陥つて後には後顧の憂なく、十月、婁室は汾州汾陽縣・石州離石縣及びその屬縣溫泉孝義縣西四十里・方山同今・離石同今を降し、蒲察は壽陽今を降し、平定軍平定縣及び樂平昔陽縣を取り、遼州遼縣・榆社同今・遼山遼縣・和順同今諸縣を招降した（金史卷七）。宗望等も各地に宋軍を破り、十一月、宗翰は太原、宗望は眞定眞定縣より汴京に赴き、十一月十五日より圍攻すること四十日餘にして閏十一月丙辰二十（金史卷三本紀）之を陥れ、翌天會五年二年、河南の地に宋の太宰張邦昌を立て、大楚皇帝となして金の藩屏たらしめ（金史卷三本紀三月丁酉條）、三月末より四月初めにかけて、宗の太上皇帝（徽宗）今上皇帝（欽宗）以下宗族后妃臣僚を擒にし珍寶圖籍の類を奪つて引き揚げた（金史卷三本紀）。卷七四宗翰傳。東。十朝綱要卷一九等。

## (三) 宗望・劉彥宗死後に於ける宗翰の勢力伸張

山西に歸還した宗翰は、完顔希尹、高慶裔、蕭慶等の腹心を擁して勢威を振ふこととなるが、宗翰の勢力を一層強大ならしめたのは此年六月(金史卷三本紀庚辰條)、宗翰と相對立して勢力を有してゐた右副元帥(金史卷三本紀によれば四年六月庚戌任官)宗望の死である。宋に於ては、五月徽宗の第九子康王が歸德に於て即位し(即ち高宗)、金帝の冊立せし楚帝張邦昌は在位僅かに三十二日にして位を退き後ち死を賜うた(宋史卷二四本紀。十朝綱要卷二一等)。新帝は諸將に失地回復の命を下し乍らも、二帝を始め后妃大臣等を劫去せれてゐるので、屢々使を派し幣物を贈つて金の軍帥を通問し、二帝の返還を請はざるを得なかつた。宋よりの使節は、宗望の死後は自然、必ず西京なる宗翰の許に赴いて事を議する例となり、宋との交渉は宗翰一派の人々の方寸に決し、宋は宗翰の手に躍らされたのである。更に宗翰の勢力伸張に資したのは、翌天會六年十月(金史卷三本紀によれば癸酉)、宗望を助けて漢軍都統として河北經路や汴京攻陷に當つて活躍した知樞密院事劉彥宗の死である。彼には金初に於て指導的地位を保つて活動する者の多かつた燕人の頭領としての勢力もあつたのである。劉彥宗の死が宗翰の權威擴大に利したと考へられる事例の一つに、山西に於ける樞密院の問題がある。

大金國志卷三本紀によれば

「天會三年」十二月。幹〔幹〕(宗望の本名)・粘罕(宗翰の本名)分道入侵南宋。東路之軍幹〔幹〕(宗望)・粘罕(宗翰)不主之。建樞密院于燕山(宣和四年十月庚寅宋は燕京を改めて燕山府と爲したこと宋史卷二二本紀に見ゆ)。以劉彥宗主院事。西路之軍粘罕主之。建樞密院于雲中。以時立愛主院事。國人呼爲東朝廷・西朝廷。

と見える。金に於ける樞密院は遼の南院の制に倣つたもので(金史卷五五百官志序及同志樞密院條)、天輔七年廣寧府(錦州省北鎮縣)に置かれ、後ち軍の經路の進むと共に天會二年平州(天輔七年二月より天會四年九月迄南京と號せらる。河北省盧龍縣)に移され、更に天會三年十二月、燕京が金軍の手に陥つた際こゝに移された。大金國志に幹〔幹〕不主之、粘罕〔粘罕〕主之といふのは、この移置の事實を指すものである。こ

樞密院は漢地統治の機關であり、「凡漢地選授。調發租稅。皆承制行之」(金史卷七八)といふ様に民政を掌る外、漢人より編成せられた軍隊即ち漢軍をも總べたことは金史<sup>四</sup>兵志に見えるが、又卷三本紀天會三年十月甲辰條に、知樞密院事劉彥宗が漢軍都統を兼ねたことを記してゐるのによつても明かである。劉彥宗は天會元年十一月から二年三月までの間に知樞密院に任ぜられたのであつた。さて當面の問題に立ち歸ると、大金國志によれば雲中にも宗翰が樞密院を建てたとある。又三朝北盟會編<sup>卷一</sup>所收張匯の金虜節要には、

領燕京樞密院事劉彥宗以病死。併樞密院於雲中。除雲中留守韓企先爲相。同時立愛主之。粘罕以彥宗之故。命其子芳(筈)簽書院事。粘罕以通事高慶裔知雲中府兼兩(西)京留守、西路兵馬都部署。

とある。金史には西京に於ける樞密院建置のこと、及び燕京樞密院を西京に併合せしことに就ては明文がないが、ただ卷一〇五任熊祥傳に

金人取均・房州。熊祥歸朝。復爲樞密院令史<sup>(嘗て遼の樞密院令史であつたから復といふ)</sup>。時西京留守高慶裔攝院事。無敢忤其意者。と見え、金が均・房等の州を取つたのは天會六年初のことであるから(金史<sup>三</sup>本紀)、この頃西京に樞密院の設置せられてゐたことを物語つてゐる。天會初の宗翰の勢力伸張を想ひ、西京に於て天會三年十月、諸京に魁けて太祖の廟が設けられ

(金史卷二本紀。卷三三禮志六原廟の條及卷二四)、天會の初め他處より早く女真字教授の學官を置かれた事(金史卷八三(地理志上)西京路の條には天會二年の創設となす)、天會の初め他處より早く女真字教授の學官を置かれた事(金史卷八三(納合椿年傳)等を併せ考へれば、必ずや天會初には樞密院は西京に設けられてゐたものであらう。たゞ劉彥宗の死後燕京樞密院を雲中に合

併したといふ事は判然としなない。金史<sup>卷七</sup>韓企先傳に、「宗翰爲都統。經路山西。表署西京留守。天會六年劉彥宗薨。企先代之。同中書門下平章事、知樞密院事」とあり、西京留守たりし韓企先が彥宗の死後之に代つて知樞密院事となつたといふことは節要の記事と符合するが、これだけでは雲中の樞密院の知院事となつたことは示さぬ。節要に韓企

先と共に院事を主つたといふ時立愛を金史卷七八の同人傳にあたつて見るに、之を想はしめる様な記載はなく、彼が天

會九年知樞密院事となり、十五年致仕して後間もなく歿したことを記して、「詔同簽書燕京樞密院事趙慶襲護喪事」らしめたとあり、天會十五年當時に於ける燕京樞密院の存在を示してゐる。燕京樞密院に關する記事は天會六年よりこの時迄一度も見えぬ。以上を綜合して考へるに、劉彥宗の死後、燕京樞密院を西京に移したといふことはさもあるべきことではあるが、未だ之を斷定しかねる。私は、宗望・劉彥宗の死を機として、宗翰は有能なる漢人は之を西京に迎へて樞密院を主らしめ、之に反して燕京なる樞密院は頭領を失つて萎靡閑散の狀態に陥り、恰も樞密院は西京に併合せられしかの觀を呈したのであらうと考へる。宗翰の失脚した天會十五年に至つて燕京樞密院の存在を示す記事の現れるのはその爲めであらうと見る。ともあれ、これは宗望・劉彥宗の死が宗翰の權力を増大せしめた一例として考へることができるのである。

#### (四) 河東・河北の確保と齊國建設

宗望じき後に宗翰に負せられた重任は新たに宋より獲得した河北・河東所謂兩河の地の確保である。それには先づ背後より山西を脅さんとする西夏の鋒先を弱めなければならぬと考へた宗翰は、陝西を攻略して之が勢力を殺がんとした。天會六年<sup>建炎二年</sup>宋が王師正なる者をして密書を以て契丹・漢人を誘はんとした事が發覺して、康王<sup>（金史では帝と書かず依然康王として）</sup>（伐つべしとの聲が高まると、河北諸將は陝西の兵を罷めて力を併せて南伐せんといひ<sup>（金史卷七）</sup>、閻母などはその一人で、「欲先定河北。然後進討」<sup>（金史卷七）</sup>と主張したに對し、河東の諸將は、「陝西與西夏爲鄰。事重體大。兵不可罷」とて之を聽かず、こゝにも東・西兩軍の對立を示した。宗翰は「初與夏約夾攻宋人。而夏人弗應。而耶律大石在西北交通西夏。吾舍陝西而會師河北。彼必謂我有急難。河北不足虞。宜先事陝西。略定五路。既弱西夏。然後取宋」と強硬に反對したので結局太宗之を仲裁して、「康王權<sup>（高宗）</sup>。當窮其所往而追之。俟平宋當立藩輔如張邦昌者。陝右之地亦未可置而不取」<sup>（以上金史卷七）</sup>（七四宗翰傳）と命じ、こゝに於て宗翰の部將婁室・蒲察・繩果・婆盧火等をして

陝西を攻略せしめ、銀朮可を太原に耶律余睹を西京に留め、宗翰自身は山東・河南の経略に従つた。太祖の皇子宗弼の軍は天會七八年にかけて、楊州より江を渡つて南走した高宗を追つて明州（浙江寧波府）まで遠征した（金史卷三本紀、宋史二五本紀等）。陝西に於ては婁室等の征略進み、天會六年には陝西中・北部の地方を攻拔し、七年二月、宋麟府路安撫使折可求が麟（神木縣北四十里）・府谷（府谷縣西北）・豐（府谷縣西北）三州を以て降り、久しく降すこのできなかつた晋寧軍（治所は今葭縣）を陥れ、四月には鄜（鄜州）・坊（坊州）二州を取る等（金史卷三本紀、卷七十二婁室傳）、西夏の東南邊に迫つて之を壓迫し、金の勢力を陝西に扶植してゐる。

金は新たに獲得した河北・河東の地を確保せんが爲めに、諸將をして宋の勢力を掃蕩せしめる一方、或は詔を發して新領地の住民に對しては之を招輯安全するを旨とすべしといひ（金史卷三本紀天會五年六月庚申、七月甲午候等）、宗翰が、「河北・河東・府・鎮・州・縣。請擇前資官良能者任之。以安新民」といへば太宗は耶律暉等をして宗翰の許に遣し、更に耶律暉の如き者を選んで派遣することを命じてゐる（金史卷七、四宗翰傳）。又八月丙戌、「河北・河東郡縣。職員多闕。宜開貢舉取士。以安新民」と命じ、自來これを實施してゐる。<sup>①</sup>これ等の記事は如何に金が兩河の地の確保に力を注いだかを示してゐる。また天會七・八年に互つてなされた河東・河北の路・府・州・軍・縣改稱の事實は、この地方に於ける新しき統治の徹底を期せんとする意氣込みを現はすものと考へられるのである。更に、金は兩河の地に於ける主權を確立せんことを欲するの餘りに、次の如き暴舉をさへ敢行するに至つた。北盟會編卷一三二所收金虜節要に「爲（偽の）元帥府禁民漢服及削髮。不如式者死」とあり、繫年要錄卷二八は建炎三年九月條には稍、敘述を變へて、「金元帥府禁民漢服。又下令（ソラシム）削髮。不如式者殺之」とある。漢人風の削髮を禁じ女真風の辮髮を強ひ、漢服の着用を禁じて女真風の服裝を強制した。この禁令は北盟會編卷一五建炎二年（天會六年）二月十九日條の東京留守宗澤の奏中に、「今河東・河西（北の誤ならん）不隨順番賊。雖強薙頭辮髮。而自保山寨者。不知其幾千萬處」とあるから、おそくとも天會六年初には下令されてゐたものであらう。その禁令の嚴重であつたことは北盟會編卷一三二所收金虜節要・繫年要錄卷一三二建炎三年九月條に明らかである。<sup>②</sup>又北

盟會編卷二所收金虜節要には（要録は卷二八建炎三年九月條に同様の記事あり）「粘罕禁隱藏被虜亡人。犯人罪死」と見える。かゝる事例に於ても如何に金が兩河の地の統治に意を用ひ、宗翰が主權の確立に努めてゐたかを知るのである。

一はこの兩河確保の方針より、一は宗翰一派の勢力擴張の爲めになされた大事業は、天會六年末山東經略に従つてゐた撻懶に降つた宋の知濟南府劉豫なるものを擁立して、宋に對する前衛國齊を建てしめたことである。劉豫は七年三月、「知東平府」。充京東・西、淮南等路安撫使。節制大名・開德府・濮・濱・博・棣・德・滄等州」しめられてゐる（要録卷二一建炎三年三月條）。これは宗弼等の南征によつて宋の勢力の萎縮した黃河以南の地を劉豫の統治下に置かんとしたものである。勿論、劉豫に許されたのは民政關係の事のみで、軍事上の事項は要衝の地に駐屯してゐる撻懶の手によつて決せ

（大金弔伐錄卷四差劉豫節制諸路總管安撫曉告諸處文字）

られた。②、撻懶の勢力擴張の事實として考へられる。さて河南の地の統治を委せられた劉豫は、あはよくば帝位に即かん

と、の心を生じて撻懶に結託して野望を遂げんとし、撻懶亦之に應ぜんとする氣配あり（北盟會編卷一四一所收金虜節要。金史卷七七昌傳）、この度び

の宋帝討伐に際して、張邦昌の如き者を立て、藩輔となすべしとの命令を受けた諸將が各々己が意中の漢人を推さんとする情勢にあるを看取した宗翰の腹心高慶裔は、宗翰に説いてこれらに一步を先じて劉豫を冊立し、内は以て太宗の詔

に副ひ、外は劉豫に恩を賣つて宗翰の勢力の擴張を目論んだのである。宗翰之に賛せざる筈なく、慶裔の奔走によつて

劉豫冊立の獻立成り、太宗の許可を得（北盟會編卷一四一所收金虜節要）、天會八年九月劉豫は冊を受けて大名（河北省大名縣）に即位し（宋史卷四七、五劉豫傳等）、

後幾くなく東平（山東省東平縣）に還り（要録卷三七建炎四年九月戊申條）、天會十年四月（齊の阜昌三年）再び汴京に遷都した（要録卷五三等）。こ

こに金の宋に對する前衛國が出現したのである。その版圖は今の河北・山東・河南の地に互り、天會九年金の勢力下

に入つた陝西の地を増封せられてゐる（金史卷三本紀）。然し乍ら齊國は、自力を以て領内を統治し宋に對抗するだけの實力は

なく、繫年要録卷五三紹興二年四月庚寅條に、「凡軍國事以至賞刑鬭訟。毋巨細申元帥府取決。沿河沿淮及陝西、山東等路皆駐北

軍」と見えるほか、その領内に於ける金軍駐屯の記事は一再にして留らぬ。劉豫は要するに一個の傀儡にしか過ぎなかつた。しかし前衛國は餘り強力でない方がよいもので、宗翰は之を驅使し、機會を覘つては南侵の兵を擧げしめ、南方半壁を保つてゐる宋を壓迫し、前衛國としての任務を行使せしめたのである。

然らばこの齊國の出現は金の兩河に於ける統治の徹底に寄與する所があつたであらうか。この國は微弱なりとはいへ漢人の國である。金が主權の確立に腐心してゐる兩河の漢人が、髣髴胡服を強ひられる金の治下に在るを嫌つて同族の國であるこの齊國に流入し、不平の徒相聚つて不軌を圖らんことも保せられず、劉豫とても漢人であるからその舉措も逆覩できぬ。宗翰は之を慮つて次の如き暴舉を斷行した。大金國志卷六天會八年冬の條に、「粘罕（宗翰の本名）密諭諸路。令同日大索兩河之民。一日北境州縣皆閉門。及拘行旅于道。凡三日而罷。應（オラ）客戶並籍入官。刻其耳爲官字。鎖之雲中。及散養民間。立價鬻之。或驅之于回鶻諸國以易馬。及有賣于萌骨子・迪烈子・室韋・高麗之域者」と記し、更にこの命令の徹底振を記して、「樂壽縣得客戶六十八人。誤作六百八人以報。粘罕必責其數。縣官執窮民以足之」といひ、更に、「被掠歸雲中者不令出城。無以自活。士大夫往往乞食于途。粘罕患貧民之多恐致生事。遂以散米賑濟爲名。誘三千人出城。令甲士坑之」といつてゐる。かゝる暴舉を敢行した理由を述べて大金國志は前引の記事に引續き、「蓋既立劉豫。以舊河（北宋徽宗崇寧四年に安定せる黃河北流のこと。大部分今の北支那の運河の線に同じく、大名の東方を北流して天津方面に向つて海に注ぐ。）爲界。恐逃歸故耳」とあり、宋史卷四七五 劉豫傳にはこの事を要記して、「金人既立劉豫。以舊河爲界。恐兩河民之陷沒者逃歸。下令大索。或轉鬻諸國。或繫送雲中。實防豫也」といつてゐる。記述餘りに誇大に失する爲めに、或は之を宋人の妄作と考へるかも知れないが、金史卷六 世宗本紀大定四年正月戊子條に、

上謂侍臣曰。秦王宗翰有功於國。何乃無嗣。皆未知所對。上曰。朕嘗聞。宗翰在西京。坑殺囚者千人。得非其報耶。

とあり、この暴舉が實際に行れたことを證示してゐるので、宋人の妄作として一概に之を斥け去ることは出来ぬ。かゝる種類の記事はその後にも見え、繫年要錄卷四紹興元年九月條に、「宗維〔宗翰〕患百姓南歸及四方姦細入境。慶裔請禁諸路百姓不得擅離本貫。欲出行則具人數行李。以告五保鄰人。次百人長。巷長。次所司。保明以申州府。方給番漢公據以行。市肆驗之以鬻飲食。客舍驗之以安止。至則繳之於官。回則易之以還。在路日限一舍。違限若不告而出者決沙袋二百」<sup>26</sup>とあり、これも少しく誇張した感じはあるが、かうした事實もあつたのであらう。金史は、金人が漢人に對して加へた暴舉に關する記載は故らに省いてゐる様であるが、前引金史世宗紀の如く、思はぬところに馬脚を露してゐるのである。齊國の出現が金をしてかゝる舉に出でしめたといふことは甚だ興味深い事であり、かくして兩河の地に加へられた宗翰の強權が、この方面に於ける金の主權の確立を速にすること甚大であつたらうことは明らかである。

#### 四 金室内部に加へられたる宗翰の勢威

##### (一) 漢人官僚に對する抑壓

以上漢地に於ける宗翰の活躍に就て説述した。次に金室内部に於ける宗翰の活躍に就て敘述してみたい。前述の如く、國內に於ては、宗幹等が漢人の參割を得て國家組織の完成に力を致し、天會四年初めて尙書省以下諸司府寺が建てられ26（金史卷七八韓企先傳）傳卷八三張通古傳、更に禮制度が議せられる（金史卷七九宇文虛中傳）卷一二五韓昉傳等著々實績を擧げてゐたのである。創業期に屬する國家に於ては屢々見られる様に文化的指導者の立場に在る人々の勢力の増大を致すは避くべからざる勢ひである。金國に於ける漢人の威勢は著しいものがあり、殊に燕人は新しき勢力を金國內部に生じて來たものであらう。金史卷八張通古傳には、「天會四年初建尙書省。除工部侍郎兼六部事。高慶裔設磨勘法。仕宦者多奪官。通古亦免去」卷三とあり、通古



は易州易縣の人にして、劉彥宗と善かりし爲めその推輓によつて金に仕へたことが見える。繫年要錄<sup>卷五</sup> 紹興二年（天會十年）三月條には、「左副元帥宗維（<sup>二</sup>宗翰）諡樞密院。磨勘文武官出身遷秩冒濫。命西京留守高慶裔<sup>參</sup>主之。奪官爵者甚衆」とてその實施の時期を窺はしめる。又金史<sup>卷九</sup> 趙元傳には、「其後朝廷立磨勘格。凡嘗仕宣和者皆除名籍。元在磨勘中」といひ、趙元は涿州范陽の人、郭藥師に従つて宋に仕へたが、藥師が金に降ると、樞密使劉彥宗は元を辟して樞密院令史となしたとある。想ふにこれはこの新興の勢力に對する宗翰の抑壓にほかならぬ。宣和に仕へたといふことがその條規の一つに數へられてゐたとすれば、燕人にして金に仕へしものは多くこの際陶汰の憂目を見たもので、金史に見える二つの事例が共に知樞密院事劉彥宗の推舉によつて仕官せしものであることは、宗翰が劉彥宗死後に於て彥宗のいきのかゝつた燕人の勢力の抑壓を圖つたものであることを思はしめるのである。

## （二）熙宗擁立

宗翰の勢力の絶頂は天會十年太祖の嫡子宗峻の子合刺（<sup>宣</sup>即<sup>熙宗</sup>）を太宗の皇儲に推した時である。金史<sup>卷三</sup> 本紀天會十年四月庚午條を見ると、太祖の孫亶を以て諡班勃極烈と爲したことが記されてゐる。諡班勃極烈は儲嗣をも意味する最高官なのである。太宗が太祖より位を繼ぐに際し、兄より弟に傳へて兄の子に及ぼすといふことを約した（<sup>要錄</sup>卷八四紹興五年正月條に神麓記に據つて記し）から、その約束の手前己が長子宗磐を立てることもならず決しかねてゐたが、この時山西より入朝した宗翰は、希尹と共に宗幹を動かして亶を推したので、太宗は且つはその勢威に壓せられ、且つは義奪ふべからずとも考へて遂に之に従つたのである（<sup>金史</sup>卷七四宗翰傳）。宗翰が亶を推したのは、亶は天輔三年生れといふから（<sup>金史</sup>卷四本紀）この時十四歳の少年である。相當の年輩の宗磐よりは未だ若年の亶を推し、その幼弱にして制し易きを利用して自己の羽翼を張らんとする企圖に出でたものであることはいふまでもない。この時宗翰は都元帥を兼領し（<sup>金史</sup>卷三本紀）名實共に軍職の最高位を占めたのであるが、しかし彼の思惑は果して實現したであらうか。

## 五 宗 翰 の 失 脚

この頃金の内政漸く整ひ、漠地の經略に容喙するだけの餘裕を生じて來たので、從來は元帥府の獨斷專行に委せられてゐた事どもは、次第に之を中央政府の手によつて行ふといふ傾向を生じて來た。その一例として金史<sup>卷三</sup> 天會十一年八月戊戌條に、「詔曰。比以軍旅未定。嘗命帥府自擇人授官。今並從朝廷選注」と見え、元帥府に委せられてゐた

卷三  
本紀

授官の權を朝廷を收めてゐる。又同卷同年二月己亥條に、元帥府が、「承詔賑軍士。臣恐有司錢幣將不繼。請自元帥以下有祿者。出錢助給之」と言つたに對し、詔して「官有府庫。而取於臣下。此何理耶。其悉從官給」といつてゐるのも、元帥府の行動を抑制して、中央政府の權威を知らしめんと企圖である。これは朝廷に於ける反宗翰派の勢力の強化を想はしめると共に、宗翰等外征諸將の凋落を豫告する事例である。反宗翰派の急先鋒は、儲貳の位を失つた宗磐であり、内治派の巨頭宗幹も彼の跋扈には快からず思つてゐたであらうし、宗翰によつて抑壓せられた漢人達も反宗翰派の主要なる勢力を成してゐたことは充分察知できる。さて天會十三年正月、宗翰にはよき理解者であつた太宗が崩じ、諸班勃極烈宣が帝位に即くと、この反宗翰の空氣は俄然強化を加へ、三月甲午には宗翰は太保、領三省事に祭り上げられ、晉國王に封ぜられて<sup>(金史卷三本紀)</sup>兵權を剝奪せられた。これは太宗即位、新帝即位に當り、宗翰が山西より入朝した際に乘じて不意打に斷行したものであらう。十一月には元帥左<sup>(右の誤)</sup>監軍完顏希尹を尙書左丞相兼侍中に、太子少保高慶裔を左丞に、平陽尹蕭慶を右丞に任じた<sup>(金史卷三本紀)</sup>。かくて宗翰の領袖は悉く兵馬の權を失ひ根據地山西から引き離されたのである。加之、宗翰の腹心高慶裔は收賄の罪を發れて大理寺に下された。宗翰は自らの官を免じて庶人となつてその罪を贖はんと乞うて許されず<sup>(北盟會編卷一七八所收金廢節要)</sup>。六月庚戌慶裔遂に誅に伏し<sup>(金史卷四本紀)</sup>、宗翰亦之が爲めに憂悶の裡に七月辛巳<sup>二十</sup>日歿してゐる<sup>(金史卷四本紀)</sup>。劉豫の齊國は唯一の支持者たる宗翰の失脚により、孤影悄然として没落の一路を辿り、十五年十一月丙午<sup>十八</sup>日、國を存すること僅かに八年にして遂に廢せられたのである<sup>(金史卷三本紀)</sup>。

## 六 結 語

宗翰はかくして宗室内に於ける反對によつて没落した。その活躍の迹を考ふる時、兩河の確保といふ事は一に宗翰の努力に負ふものであることを痛感する。漢地の經略は之を宗翰の手に委し去ることによつて金は本地に於ける統治に専念し國家組織の完成に邁進することを得た。金はこの方面より漢文明を享受し、漢人の誘掖によつて新帝熙宗は漢人天子の如き態容を備へたのである。又この期間に於て金人は漢地統治に習熟する機會を得、齊國廢止後はその故地に進出して之を充分之を收拾するだけの實力を有するに至つた。齊の舊領は宗翰亡き後に宋との交渉の衝に當つた撻懶の陰謀によつて一旦宋に返還せられたが、皇統元年宋紹興十一年淮水、大散關を結ぶ一線を以て兩國の境界となし和好が成立するに及んで再び金の治下に入ると、此年、さきには樞密院、熙宗天眷元年以降は行臺尙書省天眷元年九月、燕京樞密院を改め行臺尙書省となした（金史卷二四地理志上西京條）の管轄下に在つた燕京路を中央政府なる尙書省に隸せしめてゐる（金史卷二四地理志上西京條）。これは官制上に現はれたる金の漢地進出の實相であり、金人南進の勢はこの前後より盛んになるのである。

山西北部の地が邊外の外族との關係に於て甚だ緊要の地たることは既述の如くである。西夏の侵略は宗翰の手によつて抑へることは出来たけれども、この方面には遼の遺臣の居住する者多く、且又邊外の雲内州には天會七年奚第一第三部を徙戍せしめたといふ様な事實もあり（金史卷二四地理志上西京路雲内州條）、依然として錯雜、難治の状態を脱しなかつた。天會十年遼の降將にして元帥右都監に任ぜられたる耶律余睹は、宗翰の不在に乗じて燕京統軍稿里と謀り、燕雲の郡守の契丹、漢兒と約して、女真人にして官に在り軍に在る者を殺さんとした事が發覺して謀叛の徒は一掃せられたが（金史卷三本紀。卷一松漢紀。卷一開等。）、未だ平穩の地とはならなかつたのである。これは、皇統元年燕京路は之を尙書省に隸せしめてゐるにも拘らず山西及山後諸部族は之を元帥府に隸せしめてゐる（金史卷二四地理志上西京路大同府條。卷七七宗弼傳）ことによつても推測される。實にこの地方は宗翰の手によつても之を如何ともする能はずして、難治の状態を次の時代にまで持ち越したものだといふべきである。

## 註

①金史卷七四宗翰傳に「宗翰本名粘沒喝」。漢語訛爲「粘罕」<sup>一</sup>と見える。宗翰は漢名である。宋人の史料には粘罕に作るものがある。又漢名を宗維となすものあり、建炎以來繫年要錄にもその例が多い。大金國志卷二七開國功臣傳の粘罕傳に「粘罕小名烏家奴。一名粘漢。言其貌類漢兒」。後改名宗維<sup>二</sup>とあるのもその一例である。洪皓の松漠紀聞には「粘罕者吳乞買三從兄弟。名宗幹<sup>三</sup>。小名烏家奴。本曰粘漢。言其貌類漢人也<sup>四</sup>」とある。幹は翰の誤である。なほ繫年要錄は改譯して尼瑪哈に作ることが多い。

②西京攻陷の狀は、金史卷七一幹魯傳、卷一九世紀景宣皇帝條及び完顏婁室神道碑（吉林通志卷一二〇）や昭代叢書壬集及び遼海叢書第一集所收柳邊紀略卷二十に收めらるるに見ゆ。

③和田清氏は史林第十六卷第二號所收論文「豐州天德軍の位置について」に於て、唐の豐州は元來河套内の西北邊にあり、初設の天德軍がその管轄を受けた爲めに「豐州天德軍」の名が起つた。後に遼の時之を東方の今の歸化城白塔の地に移すや、豐州天德軍は忽ち新舊の兩者を生じ、その豐州の名は概して新豐州の地に移つたが、天德軍の名は寧ろその舊所に留り、豐州天德軍と公稱しながら、豐州は歸化城東にあり、天德軍は包頭五原の方面にあつたといつて居られる、然らばこの天德も、包頭以西の地と解すべきであるが、これには少しく不都合を生じる。完顏婁室神道碑によれば、この夏軍來寇の事を記して、「明日聞夏人出兵三萬援遼過雲内上矣。幹魯以諸軍會天德<sup>一</sup>」とある。雲内州治は和田氏に據れば歸化城の西方なる薩拉齊附近（一九六頁）である。山西北部に根據を有する金軍が兵を會したといふ天德は、それよりも東方でなければならぬ。さすればこの天德は包頭以西に治した天德とは考へにくい。又金史卷二本紀天輔六年四月戊戌條に「開母・婁室招降天德・雲内・寧邊・東勝等州<sup>二</sup>」とある。和田氏に従へば、東勝州治は今日の朔平の邊外、蠻漢山南の涼城（寧遠）附近であり（一九五頁）、寧遠州治は綏柔卷三疆域考下に綏遠省清水河縣の南に擬してゐるのに従ふべきである。他の三州の位置と併せ考へれば、天德を包頭以西と解するは餘りにも西に偏し過ぎる感があり、四州連書の順序も可怪しい。この二つの記載に見える天德は、和田氏が歸化城東に比定してゐる豐州天德年節度使の居城を指すものではなからうか。天輔六年六月、金・夏兩軍の決戦地たる耶俞水（婁室神道碑に見ゆ）、野谷（金史に見ゆ）、昂阿下水（三朝北盟會編卷一〇所引燕雲奉使錄に見ゆ）は薩拉齊・白塔驛間に求むべきであらう。

④史林第二十卷第二號所收秋貞實造氏論文「遼淵の盟約と其の史的意義」中（三八二頁註⑧參照）。

⑤金史卷七六果傳に「使亮顏希尹奏捷。且請從西南招討司諸部于內地。」といひ、卷八二郭企忠傳に、郭企忠が來降せしことを記し、「軍師命同勾當天德軍節度使事。徙所部居于韓州。」とあることや、卷七八時立愛傳に、時立愛が、金が漠地を取敗する毎に居民を本地に遷住せしめることの非を申上げたのに對して太祖が答へた語中に、「山西部族緣遼主未獲。恐陰相連結。故遷處于嶺東（張廣才嶺の東）。西京人民既無異望。皆按堵如故。」といつてゐる。

⑥今濱江省阿城縣南方白城の地。熙宗天眷元年に上京と號せられるまでは京師或は内地と稱せられて居た（金史卷二四地理志）。

⑦即ち宋が毎歲遼に與へて居た銀二十萬兩、絹三十萬匹の外に、燕京は金の兵力を以て下したといふ理由で燕京及び六州の代稅錢百萬緡を加へ、更に西京軍兵を犒ふ意味で銀絹二十萬を求め、なほその上に糧二十萬碩を要求したのである（北盟會編卷一四・一五 皇宋十朝要卷十九等）。

⑧この地名はよく判らないが、宋史卷四八六西夏傳下に、「結罕遣撒撥使夏國。許割天德・雲内・金肅・河清四軍及武州等八館之地。約攻麟州。以牽河東之勢。」とあり、金史卷一三四西夏傳に、「初以山西九州與宋人。而天德遠在二隅。緩急不可及割。以與夏。」といひ、宋都を破つて後、陝西北部の地を夏に與へることゝなし「以易天德・雲内。以河爲界。」とあれば、天德・雲内等州はこの時西夏に割讓したものに見える。

⑨詳しくは都元帥府といふべきである。金史卷五五百官志五都元帥府條に、「掌征討之事。兵罷則省。天會二年伐宋始置。」とある。二年は三年の誤である。又その官員を擧げて、「都元帥一員從一品。左副元帥一員正二品。右副元帥一員正二品。元帥左監軍一員正三品。元帥右監軍一員正三品。左都監一員從三品。右都監一員從三品。」と見える。卷三本紀天會三年十月甲辰條に耶律余睹を元帥右都監となしたとあるから、左右都監は正しくは元帥を冠して呼ぶのであらう。卷四四兵志によると、「天輔五年。興遼主。始有内外諸軍都統之名。（中略）三年伐宋。更爲元帥府。」といひ、大金國志卷四には、これが劉彥宗の議によつてなされたものであることを言つてゐる。天會三年十月の當時に於ては、山西側の諸將は元帥府の諸官に任ぜられてゐるが、その他の將帥は依然都統に任ぜられてゐる。元帥府の諸官の備るのは、天會五年八月（金史卷三本紀丙戌條）である。なほ卷四四兵志に、「金制都元帥必以三諸班勃極烈爲之。恒居而不出。」とあるは、この當初の事實を定制の如く記したもので、これは明かに誤である。

⑩韓企先、韓昉、時立愛等がその尤なるものであり、後には宋使宇文虛中等も京師に留められて國家組織完成に參劃してゐる。少し後

ちのことであるが、大金國志卷一二に、「熙宗自爲童時聰悟。適諸父南征中原。得燕人韓昉及中國儒士教之。」とあり、その結果盡く女眞の故態を失つたことを記してゐて、外征軍諸將の不在が彼等をして充分なる活動をなさしめたことを窺はしめる。

⑪金史に於て高麗裔の名の初めて見えるのは、卷八四楊盆溫敦思忠傳天輔三年六月の處で、遼の冊文に金を東懷國といつたのに憤慨した太祖は、「使宗翰・宗雄・宗幹・希尹商之冊文義指」。楊朴潤色。胡十答・阿撒・高麗裔譯契丹字上。たとある。繫年要錄卷一によれば、「慶裔渤海人。本東京遼の東京今遼陽戸部司譯譯吏。稍知書」とその前身を言つてゐる。言語を能くする所から金に用ひられたので、天輔六年には宋に使して燕京・西京の地を議してゐる（金史卷二本紀等）。蕭慶は天輔五年耶律余睹と共に金に降つた人（金史卷一三三余睹傳）。兩人とも宗翰に従ひ汴京攻陥の際には宋との交渉に當つてゐる（要錄卷一・二等）。後ち山西に於て宗翰の股肱として重職につけられたのである。

⑫宋建炎元年（天會五年）七月に出發した金國通問使傅勞・同副使馬議遠（繫年要錄卷七七月戊戌條・卷八八月條・卷九九月條等）、同年十月に派遣せられた大金通問使王倫・同副使朱弁等は雲中に赴いて居る（要錄卷一〇十一月辛卯條。宋史卷二四本紀十一月壬辰條。卷三七王倫傳及卷三七三朱弁傳）。又建炎二年（天會六年）二月に發向した大金軍前通問使劉誨・副使王貺（要錄卷一三二月丁丑條）、兩帝返還を請願する目的を以て、同年五月に出生した、金國祈請使宇文虛中・副使楊可輔もやはり雲中に赴いたものである（要錄一五五月丙申條。宋史卷二五同日條。要錄卷一九建炎三年正月乙酉條）。又建炎三年（天會七年）五月には洪皓を大金通問使に、龔彥を副使たらしめたが、彼等も太原を経て雲中に赴いた（要錄卷二三五月乙酉條。宋史卷三七三洪皓傳等）。又同年八月、金軍の再下を慮り和を議する爲めに派遣した奉使大金軍前使副杜自亮・宋汝爲も雲中なる宗翰の許に向つた（要錄卷二六八月丁卯條。宋史卷二五本紀同日條）。更にその後、紹興二年（天會十年）金は王倫を宋に還らしめて和議を誘ふと、宋は又潘致堯・高公繪等をして大金奉表使兼軍前通問使として雲中に至つて宗翰と事を議せしめる（要錄卷五八九月壬戌條）。五月潘致堯等が歸つて「金欲遣三重臣以取信」と報ずると、宋は六月韓侂忠・胡松年を大金軍前奉表通問使副に任命して宗翰の許に遣してゐる（要錄卷六六六月丁亥條）。又紹興四年（天會十二年）正月、章誼・孫近を大金軍前通問使副となし、兩宮及び河南の地を還さんことを請うたが、彼等も雲中に赴いて宗翰・希尹等と事を議した（要錄卷七二正月乙卯及丙寅條。卷七八七月辛未條）。又九月に出發した大金軍前通問使副魏良臣・王繪も雲中に赴いたが、途中金の南伐軍に妨げられて果さず歸國した（要錄卷七九八月乙未。卷八〇九月乙丑

條。卷八十一月辛未條)。紹興五年(天會十三年)五月、何薜等も「赴大金軍前奉表通問二聖」の命を受けて雲中に行つてゐるのである(要錄卷八九五月辛巳條)。

かくて金への使節は、金帝の處へ迄は行かないで、雲中迄行つて事を議することを常とした。紹興四年九月、金に使せんとした王綽は、「今所<sub>レ</sub>攜禮物六分。黏罕以下皆有<sub>レ</sub>之。獨不<sub>レ</sub>及金主。萬一親至<sub>レ</sub>彼中<sub>レ</sub>相見。何以藉<sub>レ</sub>手。豈有<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>其臣下<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>其君<sub>レ</sub>者上。」(要錄卷八〇九月癸丑條)と言つてゐる。金帝の存在は兎角忘れられ勝ちで、かうして想ひ出すことさへ稀であつたのである。

⑬金史卷五百官志序に「天輔七年。以<sub>レ</sub>左企弓<sub>二</sub>行樞密院于廣寧<sub>一</sub>」とある。今少しく詳述すれば、金史卷七五左企弓傳に、太祖が天輔七年燕京の地を宋に割いたことを記した後に、「是時置樞密院于廣寧府<sub>一</sub>。企弓等將<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>廣寧<sub>一</sub>。張覺在<sub>二</sub>平州<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>異志<sub>一</sub>。中略<sub>一</sub>及<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>平州<sub>一</sub>。舍<sub>二</sub>于栗林下<sub>一</sub>。張覺使<sub>二</sub>人殺<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。」と見える。左企弓は虞仲文・曹勇義・張彥忠・康公弼・劉彥宗等と同じく遼に仕へた漢人で、天輔六年十二月燕京陷落の際表を奉つて金に降り(金史卷二本紀)、樞密使に任ぜられて廣寧へ赴任の途中、燕京の遷民の不平に乗じて金に叛いた南京留守張覺の爲めに殺されたのである。遼の重職に在りながら、燕人の遷徙せられるを濟はず、金の祿を食んで平然としてゐるのは怪しからんといふのが張覺の言ひ分である。なほ金史卷二本紀天輔七年四月癸巳條には、「詔曰。自今軍事若皆中<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>覆<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>留滯<sub>一</sub>。應<sub>レ</sub>此路事務。申<sub>二</sub>都統司<sub>一</sub>。餘皆決<sub>二</sub>樞密院<sub>一</sub>」とある。四月癸巳といへば左企弓の殺された前月である。此の時にはもう樞密院が設置せられてゐたのである。

⑭金史卷七八韓企先傳に、「及<sub>二</sub>張敦固伏<sub>レ</sub>誅。移<sub>二</sub>置中書樞密院于平州<sub>一</sub>」とある。張敦固は張覺が天會元年十一月宗望の爲めに破られて宋に奔つたので、十一月壬申張忠嗣と共に一旦金に降つたが、復た叛き、その翌二年五月に至つて閻母の爲めに攻殺せられた。金史卷三本紀は之を五月の條の最後に載せてゐる。さすれば樞密院の平州移置は五月以降のことである。

⑮金史卷七八韓企先傳に、「蔡靖以<sub>二</sub>燕山<sub>一</sub>降。移置<sub>二</sub>燕京<sub>一</sub>」とあり、蔡靖の降は宋史卷四七二郭藥師傳によれば靖康元年(天會三年)十二月のことである。

⑯金史卷三本紀天會三年十一月辛卯條を見ると、「以<sub>二</sub>張忠嗣<sub>一</sub>權簽<sub>二</sub>南京中書樞密院事<sub>一</sub>」とある。これは知樞密院事劉彥宗が漢軍都統を兼領して、他の諸將と共に南征した關係上任命せられたものであらう。

⑰金史卷七八劉彥宗傳に張覺の敗走後張敦固が南京に據つて叛いたこと(天會元年十一月の事である)を敘した後に、「彥宗同中書門

下平章事。知樞密院事。加侍中。佐宗望軍。」とあり、それに續いて「宗望奏。方圖攻取。凡州縣之事委彦宗裁決之。」と見えるが、これは金史卷三本紀天會二年三月己未條に、「宗望以三南京反覆。凡攻取之計。乞與知樞密院事劉彥宗裁決之。」とあるのに相當する記事であるから、劉彥宗は天會元年十一月以後、二年三月以前に知樞密院事に任ぜられてゐたのである。

⑮直齋書錄解題卷五偽史類には、「金國節要三卷」として之を掲げ、その撰者に就ては「右從事郎袁允人張匯東卿撰。宣和中隨父官保州。陷金十五年。至紹興十年歸朝。」とある。保州は今河北清苑縣の地である。金國の内情、金・宋交渉關係に就て説述する所多く、記事甚だ詳細である。北盟會編、繫年要錄は諸處に之を收録引用し、大金國志にもこの記事を採つたと思はれる處が多い。繫年要錄の著者李心傳は、要錄卷三二、建炎四年春、宗維（即ち宗翰）が高慶裔の進言によつて劉豫を冊立するに至る迄の事情を述べた處に於て、「（張）匯久在敵中。當得其實云々」とて之を信據してゐる。

⑯その實施の法を記して金史卷五一選舉志一には、「以遼宋之制不同。詔南北各因其素所習之業取士。號爲南北選。」といつてゐる。繫年要錄卷一四建炎二年（天會六年）三月辛亥條には趙子砥の燕雲錄に據り、知樞密院事劉彥宗が建議して河北の舉人を燕山竹林寺で試験した。北人（即ち遼朝治下の漢人）は詞賦を以てし、南人（宋朝治下の漢人）は經義、詞賦及び策論を以てしたといひ、北盟會編卷一一三所收金虜節要には、舉人を蔚州に於て試験し、遼人は詞賦に應じ、兩河の人は經義に應ずと見える。要錄卷二八は之と同様の記事を建炎三年（天會七年）九月に載せて、「是秋金國元帥府復試遼國及兩河舉人於蔚州云々」とあり、その時期を推知せしめる。元帥府の主宰とあれば、これは宗翰の手によつて行はれたのである。但し金に於ける選舉はこの頃に始められたのではなく、既に天會元年十一月初めて施行せられ、二年二月、八月にも行はれたこと金卷五一選舉志一に見ゆ。

⑰北盟會編卷一一三所收金虜節要に、「樞密院。河間府爲河北東路。眞定府爲河北西路。平陽府河東南路。太原府爲河東北路。去中山・慶源・信德・河中府名復舊州名。去慶陽・慶成軍名復舊縣名。改安肅軍爲徐州。廣信軍爲遂州。威勝軍爲沁州。順安軍爲安州。永寧軍爲寧州。北平軍爲永平縣。樂壽縣爲壽州。肅寧城爲肅寧縣。」とあり、要錄卷二八は之と大略同様の記事を建炎三年（天會七年）九月條に載せてゐる。右の文中中山・慶源・信德・河中府を舊州名に復したとあるは、夫々定州・趙州・邢州・蒲州に復したのであるが、慶陽・慶成の軍名を去つて舊縣名に復したといふのは誤らしい。こゝに河北を東西兩路に、河東を南・北兩路に分析したのを同時の如く記述してゐるのは誤で、河東南・北路を置いたのは河北東西兩路を分けた



前年の天會六年であることは金史卷二六地理志河東北路條に照して明白である。

②1 桑原博士論文「支那人辮髮の歴史」東洋史說苑三一五—三一七頁參照。

②2 鳥山喜一氏論文「金初に於ける女真族の生活形態」同氏著滿鮮文化史觀所收。一三三—一三四頁參照。

②3 この書の性質については四部叢刊三編所收弔伐錄跋參照。

②4 滿鮮地理歴史研究報告第四、松井等氏論文「宋對契丹の戰略地理」、防禦線としての黃河の條參照。舊河とは建炎二年十月、宋東京留守杜充が金軍の來寇を防がんが爲めに、黃河を決して河水を導いたその河道を新河と稱するのに對するもの。この事に關しては他日拙稿を發表する考である。

②5 女真本來の刑罪で、大金國志卷三科條の項に、「常刑之外又有二物一曰沙袋。以革爲囊。實以沙石。繫于杖頭。人有罪者持以決其背」。大率似「香杖之屬」。惟數多焉。」とあり、熙宗立つて刑罰を改めた際第一にこの刑を除いたといふ。

②6 金史卷五五五官志には「六部國初與左右司通署。天眷三年始分治。」とある。この時には未だ六部は分れてゐなかつた。金史卷八三張通古傳には、「天會四年初建尙書省。除工部侍郎兼六部事。」とある。

②7 宋使宇文虛中は金に留められて官制・制度の制定に與つてゐるが、金史卷七九宇文虛中傳には、「虛中恃才。輕肆好譏訕。凡見女直人輒以礦鹵目之。」とその傲慢の態度を記してゐるが、かうした事實は程度之差こそあれ漢人官僚に共通のものであつたのであらう。

②8 金史世紀を讀むに、兄より弟に傳へて兄の子に及ぼした例が多い。或はこれは女真本來の相續法であるのを神麓記の著者がこの様な話に作り上げたのであらう。

②9 金の行臺尙書省に關しては青山公亮氏論文「金朝行臺尙書省考」(臺北帝國大學文政學部史學科研究年報第一輯所收)がある。

③0 松漠紀聞は之を余都姑に作る。繫年要錄は伊都と改譯してゐるが原書には餘都とあつたといつてゐる。又完顏婁室神道碑(柳邊紀略卷二十)、完顏希尹神道碑(滿洲金石志稿第一輯及び史學集刊第一期徐廷昶氏「校金完顏希尹神道碑書後」參照)は共に余篤に作る。

(昭和十一年七月十二日稿)